

# News & Scope Handai Hospital

## 阪大病院ニュース

### 第37号

発行/大阪大学医学部附属病院広報委員会(総務課)  
http://www.hosp.med.osaka-u.ac.jp

禁転載 (この紙面は再生紙を使っています)

住所/〒565-0871大阪府吹田市山田丘2-15 TEL/06-6879-5021

# 医療の質と安全が向上

## 電子カルテを本格導入

阪大病院では今年から電子カルテを本格的に導入、完全ペーパーレスを目指しています。患者さん一人ひとりの病気に合わせた診療などの情報をすべてデータベース化し、一元化する。現在の医療はチーム医療です。情報の共有は医療の質の向上に貢献すると期待されます。

### ◆一目でわかる病状

阪大病院では1993年から電子カルテを導入しています。当初は外来や病棟から検査のオーダーや薬の処方を中心に診療施設などへパソコンで送信する程度でしたが、注射や輸血などの発注へと範囲が広がっていきましました。さらに、CTやMR

Iなどの画像をデータベース化してネット配信し、過去の画像も簡単に見られるようになりました。

### ◆会話しながら入力も

患者さんの血圧や体温などの観察記録と治療内容を合体させた「熱型表」を作成するシステムを導入しました。

### ◆判断が多面的に

ではこのような電子カルテ化は患者さんにとってどのようなメリットがあるのでしょうか？



看護師一人ひとりにノートパソコンが割り当てられ、患者さんの電子カルテをいつでもチェックできる。ナースステーション④と病室⑤で

### ◆チーム医療に

チーム医療にとって、担当する医師や看護師らスタッフが必要な時にすぐに診療録を見ることができ、治療スタッフの目がゆきとどき、患者さんの病状や治療内容について多面的に判断されるようになります。毎日、カンファレンスが行われるような状態だと言ってもらいたい。システムグレードアップのリーダーでもある医療情報部の松村泰志副部長は「情報の流出や無断使用に関しては万全の対策をとっています。また、システムダウンなどのトラブルに対してもすぐに対応できるようにしています。全面的な電子カルテ化で阪大病院の医療の質と安全がより向上すると考えています」と話しています。



この表には検温や食事の摂取量などの定期的なデータだけでなく、どの薬が服用されたかとか、どの輸液がどのくらいの速度で点滴されたかなど患者さんに対して行われたさまざまな治療を、時間を追って詳しく記録できるようにしています。

### ◆さらに、医師や看護師が患者さんの状態を見て自由にその状態を書けるようになっています。

電子カルテ入力用のパソコンを専用のワゴンに載せてベッドサイドまで持って行きます。

### ◆これまでも外来カルテは一患者一カルテとしていましたが、入院カルテは入院毎に別になっており、入院を繰り返している患者さんの記録は分散されて管理されてきました。

これまでも外来カルテは一患者一カルテとしていましたが、入院カルテは入院毎に別になっており、入院を繰り返している患者さんの記録は分散されて管理されてきました。

また、ある項目のデータの過去からの変化を見たり、ある時点のデータを横断的に見ることもできます。

また、ある項目のデータの過去からの変化を見たり、ある時点のデータを横断的に見ることもできます。

また、ある項目のデータの過去からの変化を見たり、ある時点のデータを横断的に見ることもできます。

また、ある項目のデータの過去からの変化を見たり、ある時点のデータを横断的に見ることもできます。

また、ある項目のデータの過去からの変化を見たり、ある時点のデータを横断的に見ることもできます。

また、ある項目のデータの過去からの変化を見たり、ある時点のデータを横断的に見ることもできます。

また、ある項目のデータの過去からの変化を見たり、ある時点のデータを横断的に見ることもできます。

また、ある項目のデータの過去からの変化を見たり、ある時点のデータを横断的に見ることもできます。

また、ある項目のデータの過去からの変化を見たり、ある時点のデータを横断的に見ることもできます。

また、ある項目のデータの過去からの変化を見たり、ある時点のデータを横断的に見ることもできます。

また、ある項目のデータの過去からの変化を見たり、ある時点のデータを横断的に見ることもできます。

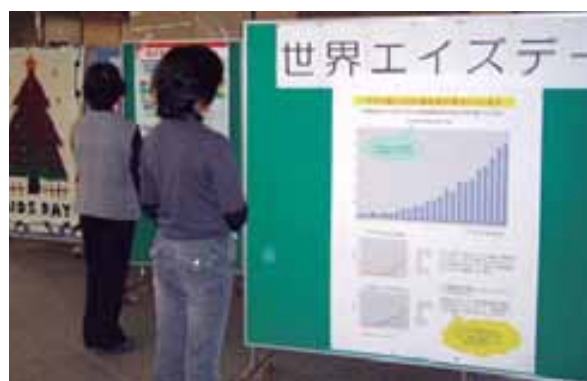
## がんで生活の質落とさず 放射線治療部が本格始動



脳腫瘍の治療に活躍するサイバーナイフ

がんの治療において放射線治療は注目が集まっています。阪大病院が、地域がん診療連携拠点病院に指定され、集学的治療の要となるオンコロジーセンターの放射線治療部が本格的に動き出しました。

がんの治療は外科的治療だけでは不十分な場合も多く、放射線治療と手術を組み合わせることで、患者さんの生活の質を落とさず、治療の効果を高めることができます。放射線治療は、がん治療において重要な役割を果たしています。



## 世界エイズデーにポスター掲示「レッドリボン」に協力者も

世界エイズデーの昨年12月1日、エントランスホールでエイズに関するポスター掲示とパンフレットを配布しました。日本ではエイズに感染する人が年々増えており、エイズに対する関心を高めてもらおうと毎年、看護部が中心となっています。

外来患者さんにはキルトパネルにエイズ患者に対する理解を深め、支援をするための社会運動のシンボルである「レッドリボン」をはり付けていただきました。今回はエイズに関するビデオを放映し、興味深く視聴される患者さんもおられました。忙しい外来受診の合間に多くの患者さんが快く足を止めてくださいました。ご協力いただき、ありがとうございました。



産科婦人科

# 女性の体に優しいがん治療

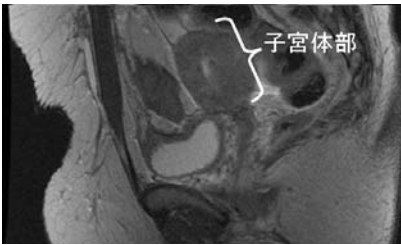
## 通常のお産も積極受け入れ

携した積極的な手術と

### 子宮の機能を温存した子宮頸部摘出手術



術前：丸で囲んだ部分ががんを含んだ子宮頸部



術後：子宮体部のみが残る。がんは完全に除かれ妊娠も可能

阪大病院の婦人科は年間200人を超えるがん患者さんの初回治療を行う大阪最大の婦人科がセンターで、患者さんの状態に応じ、生活の質を重視した治療を行い、良好な治療成績を上げています。若い女性に増えている子宮頸がんでは、0期、Ia1期までは腫瘍部分だけを円錐に切り取り、子宮を温存し、新しい手術法を導入してIa2-Ib1期の進行がんの一部でも写真のような子宮の上半分を温存し、子宮頸部摘出手術し、妊娠することが出来るようになります。更に進行したがんでは放射線と抗がん剤の併用治療を行っています。子宮体がんではIa期に対する高用量ホルモン療法による子宮温存や、進行したIII-IV期でも積極的な手術と化学療法を組み合わせた治療法が注目されています。卵巣がんでは早期など一部の場合に早期手術が可能な治療法が、また進行がんには外科と連

治療を行っています。子宮体がんではIa期に対する高用量ホルモン療法による子宮温存や、進行したIII-IV期でも積極的な手術と化学療法を組み合わせた治療法が注目されています。卵巣がんでは早期など一部の場合に早期手術が可能な治療法が、また進行がんには外科と連

治療を行っています。子宮体がんではIa期に対する高用量ホルモン療法による子宮温存や、進行したIII-IV期でも積極的な手術と化学療法を組み合わせた治療法が注目されています。卵巣がんでは早期など一部の場合に早期手術が可能な治療法が、また進行がんには外科と連

## 医療ミス防止に多様な工夫 薬剤袋にも情報を満載

### 薬剤部



患者さんが一度に飲む薬をまとめてバックパック。誤飲を防ぐことができる

阪大病院薬剤部は入院患者さんに必要な薬が必要な量だけ確実に届き、医師の指示通りに服用されるようにシステムを工夫し、最新の調剤機器を導入したり、ダブルチェックをしたり、ダブルチェックをしたりするなど薬による医療ミスが起らないよう、薬剤部は入視して調剤を行っています。散剤や水剤を調剤する際には、医師からのオーダーと間違いないかをチェックするのに行っています。錠剤については自動錠剤分包装機を導入しており、間違った錠剤カセットが挿入されると警報が作動するようにしています。病棟での配薬や服薬を間違わないようにするために、患者さんが1回に飲むべき薬をまとめて包装するようになっています(写真)。また、これまで薬剤の袋には患者さんの名前と番号しか印字されていなかったのですが、

薬品名や分量まで入れるようにしました。注射液についても、点滴薬のラベルに薬品名や分量まで入れるようにしました。医療安全を重視して、ひとめで内容がわかるようにしたのです。薬剤部から病棟へ運ぶ際には患者さんの名前が見えないように白い布を被せて個人情報を守るようにしています。阪大病院の薬剤部長は「医薬品安全管理責任者でもあり、医薬品の副作用や投与方法など安全に関わる講習会を医療スタッフ対象に開くなど医薬品の安全に対する意識の向上に努めています。」

がんの治療ならびに再発予防を目指すがんワクチンの臨床試験が阪大病院で行われています。WT1というがん細胞が作り出す特有のたんぱく質を目印として攻撃する免疫細胞を活性化させてがん細胞を排除する治療法です。WT1はほとんどのがん細胞で作られているがん抗原です。そのWT1を標的としたがん免疫療法の開発を阪大病院医学系研究科の杉山治夫教授らの研究グループは1995年から続けてきました。2001年には阪大病院の臨床研究倫理審査委員会での医師主導の臨床試験が認められました。

## WT1がんワクチン臨床試験拡大

### 欧米にも広がる

これまでのところ、成人約450人と小児の患者さんに投与しており、安全性も確認されています。急性白血病患者さんに投与したところ、3人の患者さんが約7年間再発なく元気に経過しており、おそろく治療していると考えられます。脳腫瘍の中でも治りにくいタイプの腫瘍を持つ患者さんに投与したところ、3、4年たってもよい状態が続いている患者さんが何人もおられます。乳がんが肺に転移した患者さんでもがん病巣が小さくなるなど、再発したがんや転移したがんが悪くならずにいる例が数多く見られます。腫がんでは弱い抗がん剤との併用で十分な臨床効果が望めるようになりまし

米国の75種類のがん抗原の有用性ランキングでWT1が第1位になりました。WT1はペプチドワクチン療法の臨床試験に参加して下さる患者さんには下記のホームページに応募方法があります。

<http://sahswww.med.osaka-u.ac.jp/~hmtonc/vaccine/office.htm>  
癌ワクチン療法学寄附講座

### 市民公開フォーラム「がん診療の現状と最近の話題」

最新のがんについての情報を市民にわかりやすく伝える阪大病院の市民公開フォーラム「がん診療の現状と最近の話題」が昨年12月5日に阪大医学部講義棟で開かれました。

白血病などの治療で注目されているがん細胞だけを狙い撃ちする分子標的薬について、化学療法部の水木満佐部長がその仕組みをわかりやすく解説。保健医療福祉ネットワーク部の福森優司メディカルソーシャルワーカーによる患者さんが利用できる高額医療費など社会資源についての講演。また、がんの末期患者さんや難病の患者さんを在宅で診ている出水クリニックの出水明院長が24時間対応で在宅患者さんを支えるシステムについて地域の診療所連携の重要性を指摘しました。約100人の参加者は熱心に講演を聞かれ、質問も活発にしておられました。

### 300人参加、在宅医療で活発な議論

昨年11月17日、「第8回保健医療福祉ネットワーク部病院フォーラム」が開催されました。テーマは「特定機能病院から在宅看取りへのジレンマ～調和をめざす退院支援～」で、前年を上回る300人(院外130人)の参加がありました。

地域医療に力を注がれている「おおさか往診クリニック」の田村学院長が「今、何故、在宅看取りなのか?」というタイトルで在宅医療に関して講演。その後、田村院長と連携した退院支援2事例を通じて院内医師・病棟看護師・訪問看護師・ネットワーク部看護師がシンポジストとなり、それぞれの立場での意見を述べ、意見交換を行いました。

地域からも在宅・病院関係の医師、看護師、保健師や多くの介護関係者の方々に参加いただき、活発な質問、意見交換が行われ大変有意義なフォーラムとなりました。

### 司法修習生が病院見学

第62期司法修習生20人と指導弁護士3人が昨年10月19日に、医療安全に関する講義の受講と病院見学のために阪大病院を訪れました。

将来、裁判官や検察官、弁護士などをを目指す司法修習生は、中島和江中央クオリティマネジメント部長から医療安全に関する取り組みの実際や国内外の最新の知見に関する講義を受けた後、南正人手術部副部長と藤野裕士集中治療部副部長の案内により2グループに分かれ、それぞれの部署を見学しました。その後、心肺蘇生実習にも取り組みました。

司法修習生のアンケートでは、▽病院の医療安全の体制について学べる有益な機会だった▽現場の取り組みがわかってよかった▽医師の生の声が聞けてよかった——などの感想をいただきました。



### 和やかに、連続クリスマスコンサート

昨年12月13日に小児医療センターで医師によるハッピークリスマスコンサートが行われました。いつもは白衣の医師ですが、この日はちょっぴりドレスアップ。子どもたちは保護者と一緒に楽しい時間を過ごしました=写真右下。

また、12月18日には病院恒例のクリスマスコンサートが開催され、バイオリン演奏、フィリピン民謡ダンス、シニアエイジ4名による独唱と盛りだくさんのコンサートでした。プロのバイオリニストの演奏にうっとり=写真上。またフィリピン民謡ダンスクラブの学生がバンブーダンスなど楽しいダンスを踊りだすと、会場の皆さんも手拍子でリズムを取り、にこやかなひとときを過ごしました=写真左下。

ホスピタルコミュニケーション